



いつだって窓際であたしたち

いつだって可笑しいほど誰もが誰かが愛し愛されて第三高等学校シリーズ Vol.1

【脚本・演出】

三浦直之

【出演】

新名・・・新名基浩

白子・・・大場みなみ

茉莉・・・多賀麻美

瑠璃色・・・森本華

朝・・・島田桃子

将門・・・亀島一徳

ファンタジーでなければならぬ。

いつだって可笑しいほど誰もが誰か愛し愛されて第三高等学校（イツコー）2年6組の窓際の席。校舎の二階、窓からは校庭がみえる。

季節は、夏かもしれないし、冬かもしれないし、その中間かもしれない。

天気は、きつと夏だったら雲一つない快晴で、冬だったら、雪が降っている。でも、もしかしたら、その逆かもしれない。

上手から下手へと、学校机がいくつか並べられている。舞台奥側にカーテンが吊ってあって、風ですこし揺れている（でももし冬だったら、寒いし、窓はきつと閉まっている）。

今は、昼休み。

中央か、少し上手側の席に白子が座っていて、突っ伏しながら眠ってる（それは眠ってるふりかもしれないし、まあ別に起きていてもいい）。

下手側では、茉莉と瑠璃色がカーテンに隠れながら、ヒソヒソ話をしている。

そこへ、新名が現れる。新名は何故か窓際をウロウロしながら、寝ている白子のことを妙に気にしている。

時折、カーテンの中から二人組の笑い声が聞こえる。

ケラケラケラララ。

誰かの足音が、とんとんとん、とんとんとん、とんとんとん、と三回鳴る。

新名は、白子の後ろの席に座り、背中をじっとみつめている。白子の首筋は汗ですこし湿っている。新名はその首筋をみて、自分の祖母を思い出す。祖母も首によく汗をかく人だった。幼い頃、新名は祖母によくおんぶしてもらっていた。しかし、首の汗がどうしても汚く感じられて、いつも顔が祖母の首につかないようにグッと空を見上げていた。そのせいで、おんぶのあとは、毎回首が痛かった。それでも新名は祖母のおんぶを拒否したことは一度もなかった。祖母は先月亡くなっている。新名は天井をみる。

カーテンの中から瑠璃色がでてきて、走って教室からでていく（その足音も鳴る）。

カーテンの中からは、また笑い声。

ケラケラケララ。

新名、カーテンの方をチラリとみる。

新名はポケットから、Phoneとイヤホンを取り出す。イヤホンを耳につけて音楽を流す。音楽は教室中に流れる。

瑠璃色が戻ってくる。新名の肩をたたく。

新名 「イヤホンを外してきよとん」

瑠璃色 「外れてるよ」

新名 「・・・ん、ん、あ！」

新名、慌てて、音楽を止め、そのまま教室から出ていく。

茉莉、カーテンから出てきて、瑠璃色と話し出す。

瑠璃色 「みたあ？」

茉莉 「え？」

瑠璃色 「ライン、海荷海荷」

茉莉 「あ、まだ (iPhone をとりだして確認する)」

茉莉、白子に気づくが、見覚えのない顔。瑠璃色に「誰？」ときくが、瑠璃色もしらない。

瑠璃色 「なんかすごい笑ってて」

茉莉 「(笑って) 普通に楽しんでる。これ富士山？」

瑠璃色 「静岡、かな？」

茉莉 「あれ、どっち側が山梨なんだっけ、あれ、山梨だよね」

瑠璃色 「んー。静岡って青で、山梨ってオレンジってかんじしない？」

茉莉 「なにそれ」

瑠璃色 「イメージイメージ」

茉莉 「フツーに旅行じゃん海荷もう。一人だけ夏休みだもん。帰って来ればいいのに」

瑠璃色 「迎えに来るまで帰らないって」

茉莉 「海荷が？」

瑠璃色 「いつってたよ」

茉莉 「迎えにつて、あたしたちが？なんで」

瑠璃色 「待ってるからって」



茉莉 「テスト大丈夫なのかアイツ。こんな休んで」
瑠璃色 「どうする?」
茉莉 「どうする、って?」
瑠璃色 「迎えにいくの、さ」
茉莉 「え、いくの、ほんとに」
瑠璃色 「うん、あたしは、いこつかな、って」
茉莉 「部活あるしさ」
瑠璃色 「うんだから茉莉はいんじやん」
茉莉 「山梨って、こつから電車で4、5時間、かかるでしょ」
瑠璃色 「うんだから茉莉はいんじやん」
茉莉 「……おいで、っていつてよ」
瑠璃色 「おいでよ」
茉莉 「うん。いついくの」
瑠璃色 「このあと、かなあ」
茉莉 「このあとって?」
瑠璃色 「だからこの昼休みの、あと」
茉莉 「え、今日?」
瑠璃糸 「うん」
茉莉 「今日って急に言われても……(白子をみて) あ、そうだ思い出した」
瑠璃色 「ん?」
茉莉 「あのこ。自殺未遂の子だよ」
瑠璃色 「なにそれ超おもしろそうじゃん」
茉莉 「みたことない? いつも、窓の外さ、じーって」
瑠璃色 「あ、あー、あーあー、はいはいはい。音楽室でみましたみました」
茉莉 「音楽室にも? 自殺する場所探してるらしいよ」
瑠璃色 「学校で? なにそれ、じけんせいー」
茉莉 「なんだつけ……す……いおじさんの中国人のお笑い芸人の人、と不倫してたらしいんだけど」
瑠璃色 「ほんとー?」

新名が戻ってきて、二人と目が合う。二人はカーテンの中に隠れる。

ほんの少しの時間が流れる。

新名、白子の前に立ち、意を決したように肩をたたく。
白子、むくりと起き上がる。

新名 「あ、ごめん」

白子 「・・・え？」

新名 「寝てるのに、ごめん」

白子 「ううん、寝てないよ」

新名 「寝てないの」

白子 「寝てない」

新名 「ごめん」

白子 「ごめん？」

新名 「いや、寝てないのに、寝てるって勘違いしたもんだから」

白子 「いいよ別に。寝てそうだもん、あたし」

新名 「・・・うん」

白子 「・・・それで？」

新名 「それで？」

白子 「ええっと・・・謝るために肩をたたいたの？」

新名 「違うよ違う。あのさ、席、そのの」

白子 「ここ？」

新名 「そうそう」

白子 「そっか、あたし、8組だから、誰の席かわからなくて」

新名 「うん」

白子 「あなたの席だったんだ」

新名 「ごめん」

白子 「ごめん？」

新名 「ああ、ううん」

間。

白子 「・・・それで？」

新名 「それで？」

白子 「だから、肩」

新名 「ごめん、だから・・・」

白子 「やっぱり。謝るためにたたいたんだ」

新名 「ううん、そうじゃなくなってる」

白子 「謝りたいからつて無理矢理謝る理由をつくるのは、あたし、あんまりよくないとおもうけど」

新名 「うん」

白子 「そこは謝らないんだね」

新名 「しまった！」

白子 「いいよいいよ。でも、もう少し謝られる側の気持ちも考えてね。謝るときって、ほら、えてして謝られる側の気持ちって、ね？ ないがしろにされがちだったり」

新名 「はい」

白子 「うん。よし、わかればいいよ」

白子、バッグの中から、ミニチュアサイズのグラウンドをとりだし机の上に置く。そして、そこになにやらいろいろと並べ始める。

新名、諦めたように白子の後ろに座る。

将門が入ってくる。

将門 「あれ、シューマイ」

新名 「あ」

将門 「(新名が座ってる席をみて) あー」

新名 「ごめっ (と喋ってから、しまったという表情)」

新名、席から離れる。

将門、新名が離れた席に座る。机を漁ってジャンプを取り出す。

将門 「全然再開しないよね、富樫」

新名 「あー」

将門 「こないだが入学式くらいだったから、もう一年以上でしょ」

新名 「うん」

将門 「いい加減仕事してほしいわー。時間って富樫のことだわ」
新名 「うん」

三秒か、十秒か、一分か、それくらいの沈黙。

女子二人を覆っているカーテンが、風で少し揺れる。

一瞬、瑠璃色の姿がみえて、将門と目があう。

瑠璃色と茉莉と将門がわいわい騒ぐ。

瑠璃色、またすぐに隠れてしまう。

突然、将門が歌を口ずさむ。

新名 「(将門をみる)」

将門 「ん？」

新名 「すごいよね」

将門 「・・・富樫？」

新名 「将門くんがさ」

将門 「俺？」

新名 「教室で、昼休み、ね、一目もこうはばかりらず、歌えるの」

将門 「うた？」

新名 「歌えるの、すごいすごいことだよ」

将門 「俺、そういう一面はあんだよな。いやこういう一面しかねーわ。だいつてえ、2、3個だから」

新名 「2、3個」

将門 「特徴。うんうん」

新名 「ああ」

将門 「2、3個くらいがちょうどいいよ、わかりやすくて、うんうん。どんくらい？」

新名 「おれ？」

将門 「ビジュアルの時点で相当稼いでるからやばいよ。気をつけないと、シェーマイ」

新名 「わかった」

間。

将門 「あ！」

新名 「え？」

将門 「俺いま歌ってなかった？」

新名 「歌、って？ 歌ってないよ」

将門 「まじで？ なんかすげー歌った気するんだけど」

新名 「いや歌ってない」

将門 「え？ すごいなんか口元の、この、なに、残ってるんだけど。歌いきった感触」

新名 「え、でも、歌って、ない」

将門 「は？ なにすげーこえーんだけど」

朝、二人のもとにやってきて、将門に写真の束のようなものを渡す。

朝 「楽から。ってかあたし経由しないでやりとりしてくんない直接。6組って入りづらいんだよね」

将門 「おれ、いま歌ってなかった？」

朝 「は？」

将門 「いま」

朝 「いまは歌ってないでしょ」

将門 「さっきのいま」

朝 「さっきのいまはしらないよいまきたんだから」

将門 「だれかさっきのいましらねーのかよ」

白子は、ミニチュアのグラウンドの上に、人型の人形を置く。
新名、それに気がつく。

朝 「今日だって夜」

将門 「今日の夜？ (新名にむかって) さっきのいまの話してんのに未来のことなんか考えらんないんだけど」

新名 「ええ」

朝 「訝しそうに新名を一瞥して) んじゃやめたら」

将門 「やめていいの？」

朝 「しらないけど、楽にいったらんじゃない？」

将門 「(新名に) めんどそうだもんなあそっちの方がなあ」

新名 「ええ、ええ」

将門、写真みる。

将門 「これ本物なの？」

朝 「しらん。いっとくけどあたしの方が乗り気じゃないからねいっとくけど」

将門 「(写真をみて) ん」

新名、写真の中身が気になるが、将門はそれを見せる気はなさそう。

朝、新名を不思議そうにみつめている。

将門 「これ、ここじゃん、教室」

朝 「ほんとだ。あ、これ、ちょうど将門の席じゃない？」

将門 「え、うわ、あマジだ。きもちわる」

朝 「やだあ」

将門 「学校の怪談みたことある？」

朝 「アニメ？」

将門 「もあつたけど、映画映画」

朝 「アニメあつたよね」

将門 「あつたあつた。パンチラシーンすげえあつた」

新名 「ごめんなさい、すいません」

新名、ゆっくり上手に後ずさりをする。

将門、朝、顔を見合わせる。

朝 「え？ パンツ？」

新名 「いえ、距離が」

朝 「距離？」



新名 「近すぎるなって、あ、自分が」
将門 「そんなことないけど」
新名 「いや、でも会話の輪の中に、さも混じってるかのような距離感とっちゃ
つてたから」
将門 「会話してたじゃん」
新名 「それはさっきまでなんで。さっきとは状況かわってきてるから、刻一刻」
朝 「あごめん、あたし？」
新名 「それは全然なんです、そこにいかに即座に反応してくかってことをやっ
てくかってことを怠ったのかってこと」
将門 「別に」
新名 「だからそもそももつとこつそり、フェードアウト、すべきだったなって
いう後悔もすでに、あ、してて。あの話の腰とか折っちゃって、もう、ほ
んともうなんで」

瑠璃色と茉莉、教室から出て行く。

朝 「ああ……。でもじゃあ、ちょっとまだ近くない？」
新名 「え？」
将門 「まだその距離だどこっち側な気がするけど」
朝 「ああ……」
新名 「え。(さらに後ずさり)」
将門 「そこまでいかないじゃん」
朝 「ええっと……」
将門 「シューマイ」
朝 「シューマイ的には、どのへん？」
新名 「(なんとなくの距離で)こ(こ)ら(へん)こ(こ)、とか」
朝 「(下手に移動して)こ(こ)じゃない？」
将門 「そこは？」
新名 「……なんか、二人とも、ありがとね。こんなにたのしい昼休み、はじめ
て」
将門 「いいよいいよ、みつけよう」
新名 「うん」



いろいろと場所を探した末に、カーテンの中にたどり着く新名。

新名 「ああ。(いろんな位置に移動してみる)なんか、ここだとしっくりくるかも」

将門 「あいんじゃん」

朝 「うんうん。部外者っぽい」

新名 「んじゃ、ここいます」

新名、カーテンのなかに完全に隠れる。

朝 「(将門に)もっかいみして」

将門 「え? ああ(写真をわたす)」

朝 「わ、わ、ほんとじゃん、この席じゃん」

将門 「これってどこらへんから撮ってんだろ? (窓眺めて) あっち?」

朝 「うん。あ、いまあそこの、そこ、ちょうど走ってる子のあたりじゃない?」

将門 「グラウンド?」

朝 「そうそう。(新名に)すごいいいかんじ」

将門 「あのあれ走ってんのあれだ」

朝 「知り合い?」

将門 「たぶん」

朝 「なんかいつつも走ってんのみるよ、昼休み」

将門 「ふーん」

朝 「ともだち?」

将門 「うーん。バスでき、よく一緒になんだよね、通学の。月曜だけなんだけど、あ、だから今日とか。紅葉台んところらいつつも乗ってきて、俺ほら座るとこいつつも一緒じゃん、一緒なの。その前の席にいつつも座る、から、顔はまあ」

朝 「顔はまあくらいだったら、あたしだって顔はまあだよ」

将門 「じゃ」

白子、聞き耳を立てている。それに気づく新名。白子は、ポケットから地球儀とiPhoneを取り出す。iPhoneを起動。

将門 「あいつ、あいつ？ あいつバスの中で、いつも漫画読んで。それをね、盗み読んでる。なんだっけな。主人公がすげー無口。ジャンプとかじゃなくて、女の漫画の」

白子、窓の外をみる。校庭を走ってる男子。もし、雨が降っていたら、校庭には彼しかいない。晴れていたら、サッカーをしている男子もきつといる。その内の一人と白子は目があったような気がする。その白子を新名がみている。

将門 「んでき、盗み読むんだけど、すげーのがさ、すげーの、すげーシクロしてんの。向こうのページめくる速度と、俺の読む速度がすげーの。あんまなくない？ おんなじ速度で漫画読める人とか。親近感すげーくない？ 付き合うならそういう人だな、っておもったよおれ。恋人は、おんなじ速度で漫画読める人で決まりだって」

白子 「あ、わかる」

将門、バッグから、ペットボトル（南アルプスの天然水）をとりだして、飲む。

朝 「なんのはなし？」

将門 「え？」

朝 「・・・好きなの？」

将門 「違うよ、は」

朝 「でも今のはなしって、（新名が入ってるカーテンをひらいて）ね？」

新名 「え？」

将門 「あれ、いたの？」

朝 「今のはなしって、好きってことなんじゃないの？」

将門 「は？ そうなの？」

朝 「（新名に）ね」

将門 「（新名に）え、好きなの？」

新名 「うん、でも、どーなんだろ。好きなのかも、しれない」

朝 「ほら」

将門 「なんで」

新名 「理由は、わかんない、んだけど」

朝 「好きだよ好き」

新名 「だって俺まだ名前も知らないし」

朝 「名前しつたら好きなの？」

新名 「え」

朝 「どうなの」

新名 「ちよっと急かさないで。まだわかんないけど、将門くんの話でしょ」

将門 「そうだよ」

朝 「うん」

将門 「俺が、好きか、どうか」

新名 「ええ・・・」

将門 「ちよっと聞いてくるわ、名前」

朝 「いま!？」

将門 「そわそわしてきたから」

朝 「あ、うん、いま」

将門 「うん」

朝 「そういうところあるもんね」

将門 「あんだよね」

朝 「今日、夜、いいの？」

将門 「え、あーうん、考えとくわ」



将門、教室を出ていく。

それを見送る、朝と白子。

朝、将門の席に座る。写真を取り出してみつめる。白子、校庭をみている。

白子が新名の机の上に広げたグラウンドに、山や森などを並べている。

男の子の人形をとことこ走らせている。

物を片付けるために、勝手に新名の机の中を整理しようとする、中から弁当箱がで

てくる。それに気づく新名。

新名、カーテンを伝って弁当を取ろうとするが、白子と目が合い、再びカーテンの中に隠れる。

茉莉と瑠璃色が戻ってきて、カーテンの中に入る。新名と鉢合わせする。

朝 「え?・・・っと」

瑠璃色 「写真に気づいて」ん?」

茉莉 「なにそれ、将門の?」

朝 「ううん」

茉莉 「患者の内臓が全部反対でき、鏡つかってき、手術するはなし。違う漫画だっけなあ」

瑠璃色 「(写真をみながら) 鏡でみる自分の顔とき、写真でみるのとき、違うよね」

茉莉 「わかる」

瑠璃色 「(窓に映る自分の顔をみて) 鏡だとわるくなくてもね。反対だからかなあ」

茉莉 「インスタの海荷のみてる?」

瑠璃色 「ううんなんで」

茉莉 「いっつも自撮り反転させてんの」

瑠璃色 「あ、最近でもそういうのよくみるよね、芸能人とか。あれなんで?」

茉莉 「反対のほう綺麗なんじゃん? しらないけど」

朝 「心臓が右側ってなにが?」

茉莉 「え? あ、太郎。ほら、太郎、時計回りじゃん」

朝 「え?」

茉莉 「走ってるの、反対でしょ、普通」

朝 「そいえば」

茉莉 「心臓が左にあるからなんだって。ほら、(反時計まわりにはしって) こちだと、(心臓が) 内側じゃん。だからなんだって」

朝 「だから?」

茉莉 「よくわかんないけど、負担とかじゃない、よくわかんないけど。これもほんととかどうかわかんないけど」

瑠璃色 「なんでもしってるから」

茉莉 「そうそう、あたし、基本なんでもしってる」

朝 「心臓が反対だから、反対にはしってるの?」

茉莉 「登校中にさ」

朝 「うん」

茉莉 「下校したりしてたんだよ。で、下校中に登校するの」

朝 「それも心臓が反対だから？」

瑠璃色 「まえ付き合ってたんだよ、海荷と」

茉莉 「あーそうそう。だから、一緒に登校中に下校とかしてて、海荷と太郎。

別れたんだけどね、一ヶ月まえ。まあそれで結構、たいへんなのさ。太郎は、ああやって走り出すし、海荷は旅に出るし」

朝 「海荷って」

瑠璃色 「しらないっけ？ 写真あるよ (Phone を取り出す) あ、海荷だ。ちよ
うど」

茉莉 「なんだって？」

瑠璃色 「どンドン、富士山に近づいているじゃあないか」

茉莉 「笑顔にも拍車がかかってますな」

瑠璃色 「(朝に) これこれ」

朝 「あ、ああ、ああ。(下手の席を指して) その席の？」

茉莉 「そうかなあ」

朝 「これ、いま？」

瑠璃色 「そうなのよ。傷心旅行みたいなの。下山するんだってー、富士山を」

朝 「下山？ 登山じゃなくて」

瑠璃色 「そうそう。あたしたちもよくわかってないんだけどねー」

茉莉 「登ったことはなかったことにして、降りることに重きをおくらしいよ」

瑠璃色 「結局登るんだけどね」

朝 「へえ……」

瑠璃色 「わかんないよね。付き合わされるあたしたちもわかんないもん」

朝 「あ、いくんだ、一緒に」

茉莉 「そうそう。あ、でる準備しなくちゃ」

朝 「あごめん」

瑠璃色 「登ったら、てっぺんから、朝のこともみつけるよ。みえるといいな」

茉莉 「みえないでしょ。んじゃね」

朝 「うん」

と、会話しながら茉莉と瑠璃色が教室を出ていく。

朝、それを目で追う。

白子 「(窓をみて) あ」

朝、白子の視線を追って、窓の外をみる。

外では、将門が太郎のもとを訪れている。将門は太郎を追いかけるが追いつかない。
朝、笑う。

白子 「止まっていればいいのに」

朝 「ん？」

白子 「ごめん、ずっと聞いてた」

朝 「あ、うん」

白子 「わざわざ、追いかけてないで。追いついてないし」

朝 「ね」

二人とも笑う。

朝 「ここだっけ？」

白子 「あたし？ ううん、6組」

朝 「そうだよね、みないもん。朝。あ、あたし二組」

白子 「うん。白子」

朝 「白子」

白子 「(校庭みて) 時計周りが反対って変だね」

朝 「あー、いわれてみれば。時間と一緒になのね。」

白子 「仲いいんだね、将門くん？」

朝 「ああ。幼稚園から一緒だから、楽なんだよね、女の子というより」

白子 「(自分を指して) 女の子……」

朝 「あ、いや(話題を変えるように、机の上のグラウンドを指して) これなに？」

白子 「わからない？ 机の上に、ぎゅって、世界、敷き詰めてる」

朝 「？」

白子 「(人形を指して) 太郎、(山を指して) 富士山……(ポケットからくしゃやくしゃの紙をとりだし) まさかど！」

白子、将門人形を朝に渡し、机のうえで、太郎人形と将門人形のおかけっこをはじ

める。がすぐ飽きて、また外をみる。
朝もそれを追いかけて外をみる。

朝 「(将門がスピードをあげて) お、いいぞ」

白子 「でも速いね、太郎」

朝 「何者なんだ、太郎」

白子 「なぜそんなにも走るんだ、太郎」

朝 「将門も遅くはないんだけど」

白子 「あ、くじけた」

朝 「くじけた」

白子 「くじけたね」

朝、手を振る。将門は気づかない。

白子 「(外に向かって) たるおー！」

白子、すぐに隠れる。

朝 「ちよっと」

朝、白子を立たせようとするけど、白子は抵抗する。

朝 「太郎めっちゃみてんだけど」

白子 「将門くんは」

朝 「追いかけるのに夢中みたいだけど」

白子 「せっかく教えたのに、名前。(しゃがみ

ながら覗いて) 太郎が、みてる」

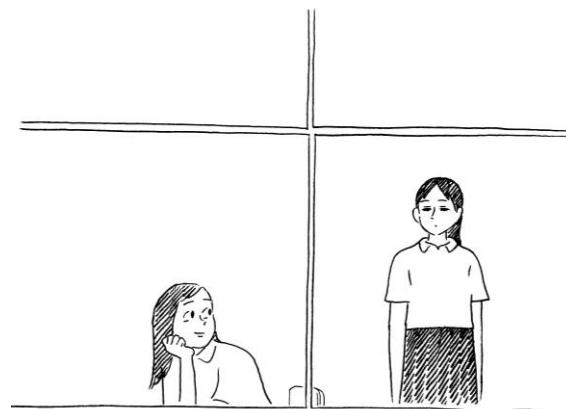
朝 「あたしが呼んだみたいになってんじゃない」

白子 「呼んでないっていえばいいじゃん」

朝 「……(外に向かって) あたしじゃないよー！

……意味わかんなくない？」

白子 「(外に向かって) 嘘だ！ さよならなんて嘘



だ！」

朝 「……え？」

白子 「知らない？ 南アルプス天然水のCM、前田亜季の」

朝 「いつの？」

白子、iPhoneとYouTubeをひらいて、南アルプス天然水のCMをながす。

朝 「知らない」

白子 「森林公園わかる、大鶴山の」

朝 「え？ あーちっちゃい頃だったけど」

白子 「遠足で」

朝 「そうそう、遠足。こっからみえないっけ（外をみる）みえないか」

白子 「このCM、あたしもすごい小さいころにみたんだけど、ずっと大鶴山の川だとおもってたんだよねロケ地。だから、大鶴山のこと、ずっと南アルプスだとおもってたんだよね。でも、まあ大鶴山で撮影されてないわけじゃない実際。それで最近さ、いつてみたの、南アルプス」

朝 「一人で？」

白子 「一人……なのかな、まあいったの。でも、全然、ピンとこなくて。やっぱり大鶴山なんだよね、あたしの中では。将門、全然おいつかないじゃん。だめじゃんあいつ」

朝 「あ、なんかよんでる」

白子 「ギブアップじゃない」

朝 「めんど」

朝、もどつて「いと手招き。

白子 「よんでるよ」

朝 「もう」

朝、教室をでていく。

白子、窓の外をみる。グラウンドをみる。

新名、ようやくカーテンから顔をだす。白子をみつめる。

白子、将門の机の上に置いてある写真を手に取り、みつめる。

写真の位置と照らしあわせるように移動し、机の上に立つ。

もう一度、窓の外をみる。新名にきづく。

白子 「びっくりしたあ」

新名 「ごめん」

白子 「好きだね、謝るの。あ、でも、いまのは謝っていいのか。気持ち悪かったもん」

白子、新名の席に座り、再び写真を見る。

新名、白子のそばに近づく。

新名 「ええ……つと」

白子 「(写真) みる？」

新名 「あ」

白子 「幽霊」

新名 「あ？」

白子から写真を受け取ろうとするが、手に触れずに受け取ろうとしたせいで変な取り方になってしまい、結果写真を落としてしまう。

新名 「ごめん」

白子 「……なんだろ。ごめんの価値をなくそうキャンペーン期間中？」

新名 「今月？」

白子 「今月？ そんなキャンペーンあるなんて知らないけど」

新名 「あ、そういうことか」

白子 「ごめんをひたすら言い続けることで、ごめんの価値自体をなくしてしまおうっていうさ」

新名 「でも、あ、そう！」

白子 「(笑って) そうなの？」

新名 「え？ 違うの？」

白子、写真を拾ってもう一度渡す。

新名、それをみる。

新名 「女の子」

白子は、iPhoneをじっとしている。

白子 「ん？」

新名 「あ、あ、弁当」

白子 「これ？」

新名 「はい」

白子、机の中から、弁当を取り出す。

白子 「崎陽軒だ」

新名 「うん」

新名、座ってたべようとするが、自分の席には白子が座っているし、将門の席には座りづらいので、結局立ったまま食べる。

白子 「座んなよ」

新名 「はい」

新名、地べたに座る。白子、なにか言おうとするが放っておくことにする。

白子 「おいしいよね」

新名 「うん……毎日、食べてて」

白子 「え？ 高くない？ ていうか飽きないの？」

新名 「飽きない、飽きない」

白子 「お米冷たいじゃん」

新名 「冷たいお米好きだから。崎陽軒のシウマイ弁当で、ご飯が俵型で、だから八つに別れてるでしょ。でも、シューマイ、五個しかないから、一シューマイ一俵だと、ご飯が余っちゃって、これポイントで、残り三つの俵をさ、唐揚げとかマグロの照り焼きとか昆布とかで食べて、あと梅とか、そ

れをどういふ順番で食べるのかって、考えて、ると、バリエーション、もう無限だから飽きない」

白子 「食べるときに、そんなこと考えて食べるの？」

新名 「その日ごとの、正しい順番がある気がするから。正しい順番を見つければ、落ち着く、から。なんか、儀式、みたいな、もん」

白子 「あんず難しくない？」

新名 「そう、いつも、あんずだけ、わかんなくて」

白子 「ちようだい」

新名 「あんず？」

白子 「うん」

新名、あんずを渡そうとするが、自分の使った箸で渡していいものか考え込んでしまい、その隙に、白子が手でとる。

白子 「おいしいけどね」

新名 「あ」

白子 「え？」

新名 「俺、ちよつと外、いるから」

白子 「なんで？」

新名 「食べるの、みるの、悪いよ」

白子 「なんで？」

新名 「女子が、あんず食べるの、なんかみちやいけない、気がするなんか。あんまり、人に見せないほうがいいよ」

白子、あんずをぱくり。

新名 「ああ」

白子 「ありがとう」



新名、白子のあんずを食べる姿に悶々とする。それを打ち消すように、弁当をかきむ。

白子 「臭いよでも」

新名 「弁当？」

白子 「うん。教室中シューマイの臭いじゃん」

新名 「俺？」

白子 「……あ、だからシューマイなのね」

新名 「ごめん、あ」

白子 「そういえば、前にシューマイの臭いするなあって、おもったんだよね、昼休み」

新名 「クラス違うでしょ？」

白子 「8組だけど、したよ、シューマイの臭い。たぶんだから、学校中に行き渡ってるんじゃない、その臭い。体育館とか校庭もぜんぶ」

新名 「……嘘だよ、でしょ」

白子 「あれ、なんか嬉しそうじゃない？」

新名 「嬉しそう、じゃないよ」

白子 「……嬉しそうだよやっぱ」

新名 「いや、なんか」

白子 「なに」

新名 「俺の、しらないところで、俺の、しらない人が、俺とおんなじ、臭い、嗅いでるっておもうと」

白子 「嬉しいの？ 変態じゃん」

新名 「嬉しいっていうか、俺、なんか、どこいても、なんか間違っちゃうから。ちやうどいいところがないっていうか自分の」

白子 「それで、見知らぬ人に弁当嗅いでもらって興奮するの？ 関係あるの？ 変態だよそれはやっぱり」

新名 「ないかなあ」

白子 「あるかなあ。あーでもある気もする。ないけど」

新名 「うーん」

茉莉と瑠璃色が戻って来る。

新名と目が合う。新名立ち上がって、道をあける。

将門は立ち上がって黙々と弁当を食べる。

茉莉と瑠璃色は席について、パンを食べながら、るるぶのような雑誌をみてる。

茉莉 「ここかな？」

瑠璃色 「高いよお」

茉莉 「えーでも他に泊まりたいところないもん」

瑠璃色 「満喫する気まんまんじゃんか」

茉莉 「せっかくだもん」

瑠璃色 「……なんか」

茉莉 「ん？」

瑠璃色 「モーレツにめんどくさくなってきたしまった」

茉莉 「え、いまさら？」

瑠璃色 「いまさらって、さっき決めたじゃん」

茉莉 「そうだけど、あたし、だって、焚き付けられちゃってるから」

瑠璃色 「茉莉いっておいだよ」

茉莉 「一人で？」

瑠璃色 「うん。あたしは、想像してるよ、こっちで、海荷と茉莉が富士山を登るのを。すぐリアルに想像するよ。いま何合目だなー、とか、その想像してるあたしのことを想像したら、もうほとんど一緒に山登ってるみたいなものじゃん。側にいるから、あたし。ここにいても、富士山にいても（パンをもぐもぐしてなに言ってるかわかんない）」

茉莉 「食べながらしゃべらないでよー。そもそも、行きたくなかったのはあたしだからねー」

白子、窓の外をみて、くすくす笑う。

瑠璃色、白子がくすくす笑ってみるのをみて、追うように外をみる。

瑠璃色、驚いた顔で、茉莉の方をたたく。

茉莉 「ん？」

瑠璃色 「ちよちよ」

茉莉も外をみる。

新名もつられて、外をみる。

茉莉 「え、朝？」

瑠璃色 「でしょ。なんで」

茉莉 「恨みあったのかな、太郎に？」

瑠璃色 「あー、さつきそういえばねなんか気にしてたしな。一緒なの将門だね。

仲いいよねー」

茉莉 「付き合えばいいのに」

瑠璃色 「え、付き合ってるんじゃないの？」

茉莉 「違うよ、朝は楽でしょ」

瑠璃色 「え、そうなの！ しらなんだ。へー」

四人とも窓の外を眺めている。

瑠璃色、iPhoneをとりだし、その光景を写真にとる。

新名、小さく「ちそうさまでした」という。

茉莉 「ん？」

瑠璃色 「送ろうとおもって、海荷」

茉莉 「嫌がるんじゃない？」

瑠璃色 「おもしろいじゃん」

茉莉 「太郎、必死」

瑠璃色 「鬼ごっこだもんね、もう」

新名、弁当の容器をゴミ箱に捨てに行く。

瑠璃色の携帯がなる。

瑠璃色 「ウケるって」

茉莉 「海荷？」

瑠璃色 「うん」

瑠璃色のiPhoneが鳴る。

瑠璃色 「電話にでて）もしもし。うん、うん、なんか全然よくわかってないん

「だけど、うん。え、あーわかんない、うんうん（茉莉に外でようの合図）」

瑠璃色と茉莉、教室から出て行く。

白子、立ち上がって、新名の机を窓の方にもっていく。

机の上につくった世界のミニチュアを、窓の外からみえる位置に置く「う」としている。

新名が戻って来る。自分の席が空いている。

新名 「座っていい？」

白子 「え？」

新名 「席」

白子 「自分の席でしょ？」

新名 「うん、そうだ」

白子 「……。あ！それでかずっと。ごめん」

新名 「いや、いいのいいの」

白子 「（窓をさして）みえるかな、向こうから」

新名 「え？」

白子 「あっちからこっちにさ……。うーん、気付かないかあ」

新名、きよとん。

白子、さつき瑠璃色が読んでた『るるぶ』が目に入る。

白子 「山梨いくんだあ。いったんだ、昨日、あたしも」

新名、自分が話しかけられているのを慎重に確認する。

新名 「昨日？ 学校は？」

白子 「その席がさ、一番、太郎が走ってるのよくみえて」

新名 「太郎って、あの、彼？」

白子 「うん。あたしも今日しっただけど名前は。昼休み、太郎が走ってるの、みるの、好きで。そうそう、だから、勝手にごめんよ。グラウンドって一周、だいたい200メートルでしょ。太郎の走った距離で旅行してるの。」

あ、ほんとの旅行じゃなくて、グーグルストリートビューってあるじゃん、あれね。(iPhoneをとりだし)これこれ。太郎が200メートル走ることに、あたしも、この学校から、200メートルずつ進んでいって。太郎のつもりで旅するの。太郎の視界だとおもって、走ってるつもりで。それで、あたしがこれ始めてから、昨日でちょうど、ちょうどではないかもだけど、一ヶ月で、それで、南アルプスにいったの、昨日。ストリートビューの中の時間って止まってるでしょ、その中を昼休みの間、走るの。うん、そう、で、そこが、ベスポジってわかって、座っちゃった」

新名 「いけがいいのに」

白子 「え？」

新名 「実際にさ」

白子 「ああ……。そうかも」

新名 「うん」

白子 「でも君に言われると腹たつね」

新名 「ごめん」

白子 「冗談冗談。そうだねえ、実際にね (iPhoneをやりして)いま、(ここ)が、太郎のみてる景色」

新名 「天気、いいね。空が綺麗。春、かな」

白子 「うん、春だね、きつと。いまは、春で、ここは南アルプス。その景色をあたしとシューマイがみてる。あそこの校庭で走ってる太郎の視線を通して。これが南アルプス街道で、こっちにいくとね芦安温泉っていう温泉があるみたいで。だから、いまそこに向かっているんだけど」

新名 「富士山は？」

白子 「富士山。こっちのほうだとおもうけど、ここからじゃみえないね」

新名 「そっか」

白子 「今日の200メートル、まだなんだ。一緒にあるく？」

新名 「あ、うん」

白子が教室を歩き出す。新名もそれについていく。

新名 「山ばっかりだね、まわり」

白子 「南アルプスだからね、あ、なんだろうこれ、看板。とら、ぎよ、まえ」

新名 「とらごぜん、かな」

白子 「虎御前鏡立石？ なにそれ」

新名 「ごめん、わからない」

白子 「寄っていく？」

新名 「あ、ああ、せっかくだから、うん」

白子 「いつか、芦安温泉を目指そう。(さくさくと歩き出す白子) 夜叉神峠まで10キロだつて。かっこいいね夜叉神」

新名 「ちよつと、歩くの、早いかも」

白子 「あ、どっちだろ？ 右かな、ああうん、右だよし右」

新名 「早いよ、歩くの」

白子 「もたもたするなあ、シューマイは」

新名 「俺？」

白子 「わ、突如、トラック、ほら」

新名 「ああうん」

白子 「なにいまの、ああうんつて」

新名 「相槌だよ、ただの」

白子 「でも、いまのああうんつて、ああとうんの間いき、うんざりが混じつてた気がする」

新名 「そんなことないよ。こっちで本当にあつてるの？」

白子 「わ！ みてねえみて！ 温泉街ぼくなつてきた」

新名 「ほんとだ」

二人、歩く。

白子 「ぜんぜん、つかないんだけど、芦安温泉」

新名 「ほらあ！ やつぱり間違えたんだよ道」

白子 「やつぱり？ シューマイつてやつぱりとか言い出すタイプだったんだあ、やつぱりなあ。あ、なんか、あそこに、人いない？ 女の子」

新名 「え、石とかじゃないの？」

白子 「違うよ、うずくまつて。ほら、あそこに」

新名 「ほんとだ」

白子 「泣いてる？」

新名 「うちの制服だ」

白子 「もう少し、近づいてみよっか」

白子と新名、一歩近づく。

新名 「あ、この子」

白子 「知ってるの？」

新名 「うちのクラスで、最近学校休んでて」

白子 「海荷ちゃん？」

新名 「そう、そう！」

白子 「この子が海荷ちゃんか。太郎の、元カノ。初めまして、お噂はかねがね。

再開の場面だよ、シューマイ」

新名 「え？」

白子 「太郎と海荷の。いま、太郎が、泣いてる海荷を、みつめてる」

さらに一歩近づく。

白子 「立ち上がった。ほら、みて」

新名 「うそ、だってこれ写真でしょ」

白子 「でも、立ったもん」

さらに一歩。

新名 「電話、してる」

白子 「あ、これ、いまの電話だ。いまっていうか、さっき」

新名 「さっき」

白子 「うん、さっき、そこでの電話。笑ってる、なんの話してるんだろう？

こえないかな」

聞

さらに一歩。

白子 「あ、こっちをみてる」

新名 「うん」

白子 「海荷ちゃんがこつちをみてる」

新名 「うん」

間。

白子 「歩いた」

間。

白子 「ばいばい、またね」

風が吹き込んでくる。

白子、窓の外をみる。

将門の机の上のジャンプがペラペラとめくれる。

そばに置いてあった写真もとばされる。

カーテンが揺れる。

白子 「シューマイ、風だ！（窓に近づく）」

新名 「うん」

白子 「あ、捕まえてる。こつちに注目しないなあ」

新名 「（窓をみて）名前わかったかな」

白子 「朝はもう知ってるんだけどね」

新名 「あ」

写真、窓の外から落ちていく。

予鈴が鳴る。

新名 「ああ」

白子 「写真とシューマイの臭いが、風に吹かれて」

新名 「俺、拾って、くる」

白子 「あ、うん。ありがとね、席」

新名 「や、うん。明日からも、全然使っちゃっていいので」
白子 「え？」

新名 「変、変な意味でなく、別に、俺の席ってわけでもないし、俺の席だけど」

白子 「ありがと」

新名 「あー、拾ってくる」

白子 「うん」

新名、教室を出ていく。

瑠璃色、新名と入れ違いに入ってくる。

茉莉、瑠璃色のiPhoneを手にとって戻ってくる。

瑠璃色 「なんて？」

茉莉 「やっぱり、帰って来るって……」

瑠璃色 「よかったね、一安心だ」

茉莉 「もう、ほんと二人ともやだ」

瑠璃色 「え？」

茉莉 「あたしだけ登りたくなってるし、なぜか。あたし全然登りたくなかったんだからねほんと。一番登りたくなかったんだよ」

瑠璃色 「わかってるわかってる」

茉莉 「急じゃん、かえってくるの、急じゃん急急。なんで帰って来るとかいうかなあ」

瑠璃色 「こんど、また登ろう。土日とかにさ」

茉莉 「どこ？」

瑠璃色 「ちかくの山探してさ」

茉莉 「あたし登りたくなかったんだよ、ほんとだからね」

白子、荷物をもって出ていく。

瑠璃色 「近場に手頃なのないっけー」

茉莉 「生物だっけ？」

瑠璃色 「生物生物ー」

茉莉 「近くの山かあ。登りたくなかったんだけどなあ……めっちゃのぼりて

ええ」

準備をしながら、教室を出ていく。

しばらくの時間。

新名が戻って来る。白子がいなくなっているのを確認する。

新名が席に着くと本鈴が鳴る。慌てて、準備するが、途中でやめる。

だれもない教室をみて。イヤホンをつける。iPhoneから、音楽を流す。

やはり、イヤホンはiPhoneから外れていて、教室中に音楽が流れる。

音楽を聴きながら、窓の外をみる。

将門が教室に戻って来る。音楽におどろく。

将門も馴染みのある歌で、将門、歌い出す。

新名はまだ気づいていない。

将門、歌声のボリュームをあげる。

新名 「わ！」

将門 「(外れてるといいうジェスチャー)」

新名 「しまった！」

将門 「(わらって) いかないの? 授業」

新名 「あ、いく、いく」

将門 「超あぢー」

新名 「これ、知ってる? んだね」

将門 「だれが歌ってるかは知らないんだけど、なんかCMとかだっけ。おぼえてるおぼえてる」

新名 「俺も、タイトル、しらなくて」

将門 「いつきいたんだっけなー。だめだ、暑すぎる。ちよい休んでいくわ」

新名 「汗、すごい、もん。きけた、名前？」

将門 「ん? あそつか。きけたきけた。不審がられたけど。太郎だって」

新名 「好きだった? あ」

将門 「え？」

新名 「いや、ズケズケ」

将門 「なにが? 好きかどうかは、まあ、まだわかんねーかな。仲良くなったよ。あと、シューマイ、臭いした。」

新名 「俺？」

将門 「ああ、本物のシューマイ」

新名 「ほんとに？」

将門 「すごいね、シューマイの臭い。一発でシューマイのシューマイってわかったもん。学校の人みんなしってんじゃない、シューマイのこと」

新名 「そう、か。風、かな……あ、風、で」

将門 「え？」

新名 「写真」

将門 「写真？」

新名 「飛ばされてしまい、ごめん。探したんですが」

将門 「ああ。俺がおきっぱにしたのが悪いし。ていうか、拾った。戻ってくる
とき」

新名 「あ！ よかった」

将門 「不気味だけどね……。ああ。んで (iPhone をみせる) どころ撮ったんだろうって、戻る前に確かめたんだけどさ。で、ここだろってところから撮ったんだけどさ。シューマイ、映ってる。女子と一緒に。幽霊とおんなじ位置に」

新名 「ほんとだ」

将門 「……いくか。いくけど」

新名 「うん俺も」

二人教室を出ていく。

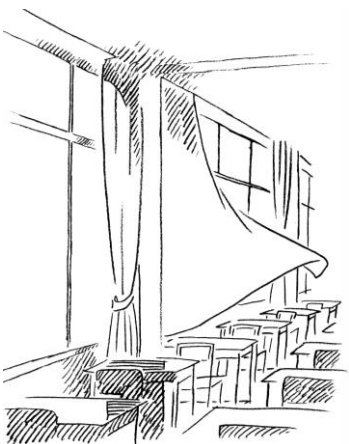
将門 「タイトルでてこないのすげーむずむずする」

新名 「うん」

将門 「あ！完璧におもいだした。完璧におもいだし
たわ」

誰もいない教室。風でカーテンが揺れる。

ゆっくりと暗転。



『いつだって窓際であたしたちの脚注』

劇中に登場する様々な固有名詞の脚注を出演俳優陣が書きました。

■BABYMETAL

メタルの神「キツネ様」のお告げに従って活動するというコンセプト、まだ若い三人の末恐ろしき美貌、perfumeの振付師であるMIKIKO先生によるダンスパフォーマンス、超絶技巧のバックバンドなど、心を掴む要素は満載であるが、気になるのは楽曲である。曲提供するミュージシャンは元THE MAD CAPSULE MARKETの上田剛士を筆頭に多岐に渡る。プロデューサーのKOBAMETALによると、多くがマッシュアップ的な技法で作られており、集まってきた楽曲からAメロ、Bメロ、サビなどを別々に取り出してミックスすること。音楽の制作を体験したことはないですが、とんでもなく時間と手間のかかることだと思います。ベビメタについて特に知識が無かったです。KOBAMETAL氏のインタビューやファンの方のブログなどを読んで、想像以上に愛情こもったチームと知り胸が熱くなりました。というかやっぱり愛情ありきでがんばるってことがまずスタートラインだよな。BABYMETALは世界を舞台に一層活躍して欲しいです。(島田桃子)

■富樫

富樫義博。幽☆遊☆白書やレベルⅡを描いた漫画家で、セーラームーンの旦那。現在連載中のHUNTER×HUNTERをしょっちゅう休載して、休載理由について様々な憶測が飛び交うミステリアスな男。2015年、ついに休載率100%を達成。そもそも休載率なんて言葉自体、富樫の為に作られた言葉かも知れません。その上、たまに載ったジャンプを覗くと、背景スカスカで「えっ?これ途中?」という気持ちになります。こんな無茶苦茶な男ですが、漫画はとても面白いので、読んだこと無い高校生は読むといいと思います!(亀島一徳)

■学校の怪談

80年代、昭和最後の世代の僕らが小学生だった頃は、学校の怪談シリーズが大流行していて、映画、ドラマ、アニメなど、とにかく作られまくっていた。僕は怖いのが苦手なので観ないようにしてたんだけど、テレビでたまたま岸田今日子の首が伸びて追いかけてくるシーンを観てしまい、最悪でした。もう首伸びなくても、夜の校舎で岸田今日子に追いかけられるだけで十分怖い。この頃流行っていたものって、金田一少年の事件簿だったりXファイルだったり、怖い感じがするものが多い気がします。80年代は臆病な少年にとって、怖いものだらけの辛い時代でした。

(亀島一徳)

■ブラックジャック

ブラックジャックと聞くと、なぜか漫画よりもくんの実写版を思い出します。本編を観たわけではないのに覚えているということは、よっぽどインパクトがあったのでしょうか。ブラックジャックを演じてきた俳優は、矢野龍二、加山雄三、隆大介、本木雅弘、岡田将生の5人。顔が濃い人が多い印象です。

なんと矢野龍二版は大林宣彦さんが監督をしています。企画・脚本はジエームス三木さん(加山雄三版も同じ)。本木雅弘版は堤幸彦さんが監督を務めています。手塚治虫が描いた名作の一つなだけあって、製作陣も豪華ですね。

原作に忠実な作品もあれば、ブラックジャックと名乗る前のオリジナルストーリーがあったり、ピノコが出なかったり、ブラックジャックが主役でない作品もあるそうです。

Wikipediaによると、原作ファンから高評価なのは隆大介版だそう。

VSHならSHIBUYA TSUTAYAに在庫があるようです。要チェックですね。(多賀麻美)

■南アルプスの天然水のCM

樽酒の出でくると「見たことありますか?めでたい場所で政治家とか相撲取とか自治会長とかが叩き割る四斗樽のあれ。その樽の下部側面から絵に描いたタコの口みたいな筒が突き出てるのだけど、そこから無色透明の液体が出てくる。そのタコの口に、ワインコルクくらいの太さの木製の栓がされてて、その木製の栓を抜く。きゅぽっていい音が鳴って、そうすると、絵に描いたタコの口みたいな筒から無色透明の液体が溢れ出てくる。樽の匂いが染みついたほんのり甘い酒。水道の蛇口みたいにとめど無く流れ出るのではなく、ちゃぶっ、ちゃぶっ、と脈打つように、もう我慢できないと言わんばかりに。なんとというか、出てしまつてると言つたほうがしっくりくるような流れ出っぷり。それを見たときに感じたエロスを南アルプス天然水のCMからも感じます。80年代のは名作揃いでした。中でもお気に入りなのは88年の作品。女生徒と女教師が溪流の岩肌に腰掛けて会話する。これは放課後?それとも授業を抜け出してきたの?シチュエーションが妄想を加速させ平然といられません。「いつも一人で来てるんだー?」という女教師の問いかけに「友だちとかあんまりいないし変わってるからわたし」訳ありな女生徒。クラスに馴染めてないのかな、良くも悪くも目立つちゃうのかな、いいじゃないそれあなたの強み!で、この女教師はなんて言葉をかけてあげるのだろう。「この山の水ね、東京でもずっと飲んでたんだよ」え、この人も訳あり?東京でなんかあったのかな!エロス!平然といられません。そこで意を決したかのように女生徒「先生、キスしたことありますか?」って、なにを急に女生徒!なにを!キスか??キスしたいのか??した、し、したのか!?もうしたのかお前!?平然といられません。お願いもうドラマチックを揚げないで。しかもこの二人お互いに言いたいことしか言っていないし。さて東京から逃げるように赴任してきた(たぶん)訳あり先生はこの切なる質問にんと答えるの!「世間の水より、南アルプスの天然水」たっぷり大滝秀治のナレーション。CM終わった。先生の答え聞けずじまい。見終わった後に広がる妄想の余韻。答えが欲しくて生唾を飲み込む。南アルプスの天然水は湧き出ている。

※YouTubeで“東アンドレスの天然水”も検索してみて。蠟人形にされるわよ!(大場みなみ)

■崎陽軒のシウマイ弁当

「歴史」「知名度」「美味しい」という三つの条件をフル装備した弁当界東の大横綱。横浜が生んだ大スターであり、老若男女問わず多くの人に愛されている。

おいキミ。今更そんなゴタクを並べるなよという声が聞こえてきます。ええ、確かに。「わたし、シウマイ弁当知りません」例えばそんな方に対して「どうも容易く語っていないものか。否。「是非一度食べてみてよー!」この一言に尽きます。そしてここに今、むすびのむさし「若鶏むすび」(広島市出身)を西の横綱として推挙します。(新名基浩)

■サニーデイ・サービス『真赤な太陽』

今から二〇年後のとある休日。昼飯はセブイレブンのメロンパンとカレーパン。とりあえず満腹。ああ眠い。万年床に寝転がる。床の上に落ちたパンくずが気になって手のひらをベタリ。「秒数える。くずに混じって何かの毛やら埃やら変な汚れがじつとりと付着する。急に暴れなくなった。けどそんな勇氣はない。そうだドライブしよう。この街で一番安いレンタカー。ハンドルが臭い。南へ向かってひたすら県道を走ること一時間。漁港に着いた。寂しい。こんなことしたってどうにもならないことくらい最初から分かっている。目を閉じた。手の臭いを嗅ぐ。ちょうどそんな時。カーラジオからこの曲がそっと流れてきたならば。きっと僕は「あの人」のことを思い出し、そしてほんの少し救われる。二〇代でキョクとくる人もいれば、三〇代でツーンとくる人もいる。不思議な魅力を持った歌なんです。二〇〇九年発表、アルバム『東京』に収録。(新名基浩)

■窓際

窓際は、窓の近く、窓のそば。

「窓際」と言われると、椅子がある気がします。

「窓の近く」と言われると、椅子はない気がします。

「窓のそば」と言われると、それはもう極めて窓、窓の縁とかを指している気がします。

「窓際であたしたち」って言われると、窓に見向きもせずおしゃべりしてる女の子達が浮かびます。(森本華)